

(資料)

中国語研究と認知言語学 その 2*
文献資料翻訳陸儉明・沈陽《漢語和漢語研究十五講》
第十二講 (2)

秋	山	淳*
間		ふ さ 子**
甲	斐	勝 二***

2 認知言語学の主要目標

認知言語学の研究目標は概ね二つにまとめられる。一つは当然ながら「認知性」、もう一つは「一般性(概括性)」である。この二つは実際には一つのものとも見ることができる。つまり、言語現象に対して、認知の角度からのみ最も一般的な解釈ができるということだ。形式言語学が先ず生成性を堅持することこそが科学性を堅持することだと考えるのは逆で、認知言語学にとっては、先ず一般性を堅持してこそ科学性が堅持されることになる。これはこうも言えよう、つまり、認知言語学理論の「認知性」と「一般性」による説明は形式言語学の理論の「離散性」と「生成性」による説明と比べ、一層「全面的」である。その全面性は、形式言語学がまず言語現象をいくつかの核心部分と周辺部分に分け、説明できないものは核心の理論から排除して扱わないという点とは異なっている。そのうえ、一層「科学的」である。その科学性は形式言語学のように述語論理モデルにのみに基づく演繹推理とは異なり、すべての説明には、みな十分な実際の

*福岡大学人文学部非常勤講師

**福岡大学人文学部准教授

***福岡大学人文学部教授

心理による検証がなされる事が要請される。以下にいくつかの簡単な例を挙げ、認知言語学が解釈の「認知性」及び「一般性」という目標を追求する意義を見てみよう。

一つの実例は、認知上の「時間順序」に基づき、異なる語句の順序の平行現象に対してなされた一般的解釈である。

時間は空間同様に最も基本的な認知カテゴリーである。言語の語句の順序は実際の時間の順序と密接な関係がある。この関係は以下のように述べられる。つまり、統語成分の配列順序は、それらの表す実際の状態或いはイベントの発生の順序を示しているのである。たとえば、一般に原因がまず先にあり、結果が後ろに来る、また条件がまず先にあり、後に行動がくると人は考える。よって複文中の原因を表す節と条件を表す節は、ほとんどが結果を示す節と行動を示す節の前にある。各種の言語の状況もまたこの事を証明する。たとえば英語の複文では、多くの場合主節が前に来るものとなっているのだが、研究によると、児童が英語習得の初期段階ではなんと、主節を従属節の後ろに置くのである。一方漢語という形態変化を欠く言語では、語句の順序と時間の順序の一致性をより一層重んじる。ある学者は「時間順序の原則」を導きだし、それにより漢語の語法の中で今まで互いに無関係と思われてきた大量の語句の順序規則を説明し一般化したのである。¹ たとえば、漢語の中の大量の動（詞）補（語）構造は、何れも時間の順序原則に従う。つまり動作が前で結果が後となる、たとえば“打—破”“打つ—破れる”、“听—懂”“聞く—わかる”、“看—见”“見る—見える”等がそうであり、“累得走不动了”“疲れて動けなくなった”“高兴得跳起来”“嬉しさのあまり跳び上がった”等もまたそうである。また、漢語の二つの文或いは述語構造を“再”“就”“才”のような時間副詞で結ぶときなどは、前の部分が表すイベントが起こった時間は、通常は後ろの部分が表すイベントが起こる時間より前である。比較してみよう。

- (14) a. 我吃过饭你再打电话给我。「私が食事してからまたお電話下さい」
b. 我工作一结束他就来了。「私が仕事を終わるとすぐに彼がやってきた」
c. 你给他钱他才给你书。「彼にお金をやってようやく彼は君に本を渡した」
(15) a1 小张上楼睡觉。「張さんは階上に上がって寝た」 a2* 小张睡觉上楼。
b1 小李骑车走了。「李さんは自転車で行った」 b2* 小李走了骑车。

漢語の状語と補語の文中の位置は概ねやはりこうである。たとえば、以下の (16a)

の“比”構文は、イベントの時間順序に符合する語順の構造(先ず“比”べた後に“高”という結果がでる)であれば言えるが、語順を逆にすると言えなくなる。また以下の(16b)の“在”構文などは、“在”フレーズが動詞の前に現れれば、起こった時間の順序が先であり(まず「馬の背中の上において」その後「跳ねた」)、動詞の後ろに現れれば起こった順序が後(先ず「跳びはねて」から「馬の背中にいる」)となる。比べてみよう。

(16) a1 他比我高。「彼は私より背が高い」

a2* 他高比我

b1 小猴子在马背上跳。「小猿が馬の背中で飛び跳ねた」

b2 小猴子跳在马背上。「小猿が馬の背中に飛び移った」

時間の順序原則を用いれば、その他の方法ではなかなか説明できない言語現象を説明することもできる。たとえば、以下の(17)の中の二つの文の違いをこれまではなかなかはっきり言えなかった。しかし、時間の角度からなら二つの文が異なる「前提」をもつと考えることができる。つまり、黒板の文字は“擦”「拭く」という動作が起こる前には黒板上にあったのであるが、“写”「書く」と言う動作ではその後に黒板に現れたものである。従って、この二つの文が言えるか言えないかと言う状況がちょうど反対になるのである。比べてみよう。

(17) a1 *他把黑板上的字写了。

a2 他写字写在黑板上。「彼は字を黒板に書いた」

b1 他把黑板上的字擦了。「彼は黒板の字を消した」

b2* 他擦字擦在黑板上。

もう一つの実例は認知上の「有界/非有界」(bounded/unbounded)に基づき、異なる品詞が示す平行現象に対して一般的な説明を行うことである。²

「有界」と「無界」の対立もまた人類の一般的な認知的メカニズムの一部分であり、これは人類の最も基本的な認知体験と認知概念の一つである。人は最初に自分の身体から何が有界の事物なのかを経験する：つまり人は息を吐いたり吸ったりでき、食事をしたり排泄したりできる。このような機能は人の体が一つの「容器」であり、容器であれば内と外の区別があることを明らかにする。さらに言えば、非有界の事物の内部はみな

「同質」(homogeneous)であり、有界の事物の内部はみな「異質」(heterogeneous)である。たとえば、水は非有界の事物であり、どんなに分けようとも、分けられたどの部分もやはり水である。これとは逆に机となると異なる部分から組み立てられた有界の事物であり、机を分割してしまえばもはや机ではなくなってしまうだろう。これらもみな人の経験の一部分である。当然ながら人のこのような認識は客観世界と完全に一致するものとは限らない。たとえば、「壁の角」にはっきりとした区切りがなかるうとも(その境は曖昧である)、しかし、我々はやはり“一个墙角”「塀(壁)の角(隅)」、「在那个墙角里」 「あの塀(壁)の角(隅)で」と言って、それを有界の事物と見なす傾向がある。人の言語能力が人間の一般的な認知能力の一部分である以上、認知におけるこのような「有界」および「非有界」の対立は当然ながらも言語構造の中に反映されるはずである。事実上名詞、動詞及び形容詞の三大実詞類においては同じような現れ方をする。

名詞について言えば、事物の「有界」と「非有界」の対立の語法における反映は、名詞内の可算名詞と不可算名詞の対立であり、名詞を修飾する量詞(classifier)にある個体量詞と非個体量詞の対立である。有界の事物は個体であり、個体でなければ数えられないし、数えられる事物は必ずや個体である。よって、およそ数量詞の修飾語を持つ名詞フレーズはすべて有界名詞フレーズである。たとえば“两条鱼”「二匹の魚」“四桶水”「桶四杯の水」“好些人”「大勢の人」等である。裸で用いる名詞は個体の事物をささないの、非有界である。たとえば“(抽)烟”「たばこ(を吸う)」、「(乘)车」 「車(に乗る)」、「(喝)水」 「水(を飲む)」等だ。動詞について言えば、“有界”の動作は時間軸上に開始点と終了点を持つ。たとえば“(把)鱼盛碗里”「お椀に魚を盛る」が示す動作などは、“盛”「盛る」が動作の起点であり、魚が碗の中に入るのが動作の終点である。逆に“盛(鱼)” 「(魚を)盛る」が示す動作などは、内在する終止点がないので、「非有界」なのだ。形容詞について言えば、漢語の中の性質形容詞が代表する性質状態は、程度に於いて「非有界」である。たとえば、形容詞の“白”「白い」はいろいろなレベルの白をまとめたものであり、不定の「領域」を示すものである。一方、状態形容詞の“雪白”「真っ白である」が代表する性質状態は程度に於いて「有界」である。なぜならば“雪白”は“白”という色の領域のある一つの領域あるいは一点にすぎないからである。

以上述べた「有界」と「非有界」の対立に基づけば、以下の数量詞と関わる語法現象

を統一的に説明できる。つまり、なぜある構造では数量詞がなければ成立せず、別の構造は数量詞を用いなくても成立するのかと言う問題だ。比べてみよう：

- | | |
|---------------|----------------------------|
| (18) a1* 盛碗里鱼 | a2 盛碗里两条鱼「魚を二匹お椀に盛る」 |
| b1* 飞进来苍蝇 | b2 飞进来一只苍蝇「蠅が一匹(飛んで)入ってくる」 |
| c1* 捂了孩子痱子 | c2 捂了孩子一身痱子「汗疹が子供の身体を覆った」 |
| d1* 雪白衣服 | d2 雪白一件衣服「真っ白な一着の服」 |
| e1* 干干净净衣服 | e2 干干净净一件衣服。「きれいで清潔な一着の服」 |
| f1* 白一件衣服 | f2 白衣服。「白い服」 |
| g1* 干净一件衣服 | g2 干净衣服。「きれいで清潔な服」 |

上の(18)中の左の例文が成立しないのは、「有界」成分と「非有界」成分とが整合しないと言う理由による。たとえば、「盛碗里」「碗の中に盛る」という有界動作と“魚”「魚」という非有界の事物は整合しない。「雪白」「真っ白である」という有界の性質状態は“衣服”「衣服」という非有界事物は整合しない。「白」「白い」という非有界の性質状態は“一件衣服”「一着の服」という有界の事物と整合しないのである。一方、右の例文はみな動作と事物、性質状態と事物の「有界」と「非有界」が互いに整合した状況である。(18)のような現象はこれまでしばしば人々を多に悩ませ、説明も難しいものだった。ところが、認知語法による分析になると異なる品詞カテゴリーの限界を打ち破り、異なる品詞に平行して起こる現象に対し、「有界」と「非有界」による一般化を行った。つまり、事物は空間における「有界」と「非有界」の対立があり、動作行為は時間における「有界」と「非有界」の対立があり、性質状態は程度または量における「有界」と「非有界」の対立がある。つまり、本来空間領域の「有界」と「非有界」だけを表現する概念が、人の認知を通し、時間領域と性質状態領域にまで応用されるものだといつてよい。

さらにもう一つの実例は、認知上の「ゲシュタルト構造」に基づき、異なる文パターンの平行現象に一般的な解説をしたことである。³

「ゲシュタルト心理学」の一つの重要な原理は、全体が部分の和より大きいということである。これに基づけば、文パターン全体の意味は各構成要素を単純に付け加えたものと等しいものではなくなる。全体がしばしば部分よりも一層際立ち、容易に人々の注意を引くこと、これはすでに認知心理学により証明されている。言語の中の一つの文パ

ターンは心理学上の「ゲシュタルト」、即ち全体構造と見なしようと認知言語学は考える。文パターンの全体的な意味を把握することにより品詞（上位類及び下位類）の分類への依存では説明できない語法現象が説明できるのである。これはまた、その文パターンの全体的な意味がその部分の意味によって決まるというより、その構成要素の意味が、文パターンの全体的な意味によって決められるという方が良いと言うことでもある。この事については、漢語の“在”構文と“給”構文の例を挙げるができる。比べてみよう：

- (19) a1 我在院子里种了几颗花。「私は庭に花をいくつか植えた」
a2 在院子里我种了几颗花。「庭で私は花をいくつか植えた」
a3 我种了几颗花在院子里。「私は花をいくつか庭に植えた」
a4 我种在院子里几颗花。「私はいくつか花を庭に植えた」
b1 我给张老师写了一封信。「私は張先生に手紙を一通書いた」
b2 *给张老师我写了一封信。
b3 我写了一封信给张老师。「私は手紙を一通張先生に書いた」
b4 我写给张老师一封信。「私は張先生に手紙を一通書いた」

上の(19)は一般に“在”構文と“給”構文の二種の異なる文パターンであり、その間には多くの平行する変化があるし、たとえば(19b2)のように、平行しない状況もある。これまでの語法分析では、文中の動詞を分類したものである。たとえば動詞を“给与”類と“非给与”類に分けたり、「付着」「非付着」類などに分けたりする。しかし、このような方法は一般性に欠け、説明力も弱い。実は、これらの文パターンの全体的な意味はそれぞれ以下のように表現できる。

- (20) a1 在某处所某动作。 (ある場所である動作を行う)
b1 对某受惠目标做某转移动作。 (動作対象目標へある移動動作を行う)
a2 在某处所发生某事件。 (ある場所であるイベントが発生する)
b2*某受惠目标发生某转移事件。 (対象目標に移動イベントが発生)
a3 某物在动作作用下倒塌某处, 动作和达到是分离过程。
(ある物が動作によりある場所に到達する。動作と到達は別のプロセス)
b3 惠予物通过转移达到某终点, 转移和达到是分离过程。
(与えられる物が移動により終点に到達する。移動と到達点は別のプロセス)

- a4 某物在動作作用下达到某处, 動作和达到是統一過程。
(ある物が動作によりある場所に到達する。動作と到達点はまとまったプロセス)
- b4 惠予物通过转移达到某终点, 转移和达到是統一過程。
(与えられる物が移動により終点到達する。移動と到達はまとまったプロセス)

こうすると、認知における「順序原則」「包含原則」によってこの二つの文パターンの共通点と相違点が説明できる。⁴ その中で“給 X”が動詞の前に来る場合 (b1 型および b2 型) は、予定された目標、動詞の後ろに来る場合 (b3 型および b4 型) は到達の終点を示すのである。「順序原則」によれば、目標はいつも行動の前にまず設定されるものだから、当然動詞の前に置かれる。終点はいつも動作の後に到着するものだから、当然動詞の後ろに来る。“在 X”に対する動詞の位置についても同様な説明ができる。その差はただ動詞の前の“在 X”が動作あるいはイベントが起こった場所を指すということだ。では、なぜ (b1) “我給张老师写了一封信。”「私は張先生に手紙を一通書いた」は可能なのに (b2) “給张老师我写了一封信。”は通常いわない (“张老师”にストレスが置かれる場合を除く) のだろうか。その差は、(b1) の“給张老师”「張先生に」がただ“写了一封信”「手紙を一通書いた」のみを包含している (かかっているのに) のに、(b2) は、“給张老师”が“我写了一封信”「私は手紙を一通書いた」を包含して (かかって) しまっているところだ。“我写了一封信”は一つのイベント (イベントはすべての参加者を包含する) を表している。一方“写了一封信”となると一つの動作を表すだけである。通常は、予定された目標のために動作がなされるものであり、予定された目標にイベントが起こるものではない。これがつまり、「包含原則」作用の結果なのである。⁵ これに対応する (a1) “我在院子里种了几颗花。”と (a2) “在院子里我种了几颗花”は、共に言えるのは、この二つの“在”構文の全体的な意味がそれぞれ“在某处所某动作”「ある場所である動作を行う」と“在某处所发生某事件”「ある場所であるイベントが発生する」であるからであり、これなら問題なく言えるのである。さらに歩を進め、「隣接原則」によって二種の文パターンの違いを説明しよう。⁶ たとえば、“在”構文と“給”構文の平行関係は、ある文パターンで動詞の後ろに“了”を付けられず、付けるなら“在・給”の後ろに加えるということにも表現されている。比べてみよう：

(21) a3 我种了几颗花在院子里。 「私は花をいくらか庭に植えた」

a4 *我种了在院子里几颗花。

- a4 我种在了院子里几颗花。「私は庭に花をいくらか植えた」
b3 我写了好几封信给张老师。「私は何通も張先生に手紙を書いた」
b4 *我写了给张老师好几封信。
b4 我写给了张老师好几封信。「私は張先生に何通も手紙を書いた」

(21a3/b3) 及び (21a4/b4) の文全体の意味はみな動作の作用によって事物がある終点にまで達することを示している。違いは、認知的に、(21a3/b3) では動作と到達行為が二つの分かれたプロセスとなっていて、(21a4/b4) では動作と到達行為が一つのまとまった形となっていることである。これが「隣接原則」の作用である。動詞が“在・給”と離れると、二つの分離したプロセスを示し、一緒に並ぶとまとまったプロセスを示すのである。これは以下の例の対立の中からも見いだすことができる。

- (22) b3 他写一封信给我, 让我转交给你。「彼は私に一通手紙を書き、あなたに渡すよう頼んだ」
b4 *他写给我一封信, 让我转交给你。

(22b3) 中の“写”「書く」は“給”「～に」と離れているから、“信”「手紙」は“转交”「取り次ぐ」することができる。なぜならば、“写/給”は分離されたプロセスだからだ。(22b4) 中の“写”は“給”と並んでいる。よって、“信”「手紙」は“转交”「取り次ぐ」する事ができない、なぜならば“写給”は、まとまったプロセスだからである。これもまたなぜ (21a4/b4) では“了”が“种在/写给”「～(場所)に植える/～(人)に書く」の後ろにのみ加えられるのかという理由でもある。なぜならば、“种在”“写给”は共に結合が緊密な複合動詞だからである。“在”構文と“給”構文にはなおその他の面の違いにも平行関係がある。さらに「数量原則」を使っでの説明も可能である。⁷ 比較してみよう：

- (23) a1 我写给张老师好几封信。「私は張先生に何通も手紙を書く」
a2 我卖(給)张老师一所房子。「私は張先生に家を売る」
b1 我写在黑板上几个字。「私は黑板に字をいくつか書く」
b2 我放(在)桌子上一盆花。「私はテーブルの上に一鉢の花を置く」

(23a) 中の“卖”「売る」は典型的な授与動詞であり、しっかりと「与える意味」を持っている。情報伝達から、授与の意味は「デフォルト(または黙認)値(default value)」

であり、“給”は実は余計であるため、現れなくともよい。⁸一方“写”は典型的な授与動詞ではなく、授与の意味も動詞の「デフォルト値」ではないので、文中に必ず“給”が出てこなくてはならない。(23b)の“在”構文も同様の解釈をすることができる。つまり、「付着義」が動詞の意味のデフォルト値かどうかを見ることになる、たとえば、付着義が動詞“放”のデフォルト値であるので、“在”は文中に現れなくともよいし、逆に付着義は動詞“写”のデフォルト値ではないので、“在”が文中に現れなくてはならない。これは明らかに「数量原則」が作用している。つまり意味の数だけ形式が用いられるのである。

認知言語学の考えでは、上述の「順序」・「包含」・「隣接」及び「数量」の四原則は意味(概念)の領域と文構造の形式の領域において、同時に作用している、あるいは、意味の領域で作用する原則が形式の領域にも「投射」されるという。これこそがよく言われる言語構造の「相同性」である。⁹このような解釈は当然充分に一般性のある説明であり、しかも、これが「語法規則」ではないとはやはり言えないのである。

3 言語中の「メタファー(暗喩)」および「メトニミー(転喩)」分析

以下では認知理論と言語認知分析におけるいくつかの重要な問題について、さらに詳細な検討を行う。まずは「メタファー(暗喩)」と「メトニミー(転喩)」の分析問題の検討である。

3.1. 言語表現や言語分析における「メタファー」の役割

「暗喩(metaphor)」とは、非常に普遍的な認知現象であり言語表現の現象である。¹⁰例えば下記の“辩论”(弁論)に関連する語や文には、「戦争」に関連した概念が用いられており、人は弁論の際に行う動作行為を事実上「戦争」とみなしていることがわかる。ある領域の概念をもう一つの領域に「投射」すること、あるいはある認知域(起点域)から別の認知域(目標域)へと「投射」する認知方法が、すなわち「メタファー(暗喩)」である。以下に例を挙げる。

- (24) a. 论战「論戦(する)」／争论「論争(する)」／论敌「論敵」／抨击「他人の行動や言論などを攻撃する」／打笔战「筆戦する」／理论战线「理論戦線」／

唇槍舌劍「激しく論争する」／同室操戈「身内同士が争う」／大張挾伐「大規模に攻撃する」／人身攻击「人身攻撃」／批評的武器「批判の武器」

b. 他们在辯論中失敗了「彼は論争で失敗した」／指揮漢奸文人围攻左翼作家「売国奴文人が左翼作家を集中攻撃することを指揮する」／这几句话击中了要害「このいくつかの言葉が重要な部分に命中した」／对他的论点提出挑战「彼の論点に挑戦する」／以子之矛攻子之盾「汝の矛で汝の盾を攻めよ」／我撤回对你的批评「あなたへの批判を撤回する」／抓住他的问题放大炮「彼の問題を掴まえて大言壮語する」／中苏大辯論没有休战「中ソは休戦なく大論争する」／对资产阶级的猖狂进攻予以坚决回击「ブルジョアジーの猛り狂った攻勢に断固とした反撃を与える」／批評的炸药味愈來愈浓「批判の強い敵意が次第に濃くなる」

具体的な概念を通じて抽象概念を理解することは最も一般的な認知方法である。従って言語において最も頻繁に見られるのも、比較的具体的な概念を用いて比較的抽象的な概念を「メタファー」で表現することである。

たとえば「人に相対して移動するもの」あるいは「それに相対して人が移動するもの」を用いて「時間」の概念をメタファーで表現し、「激动人心的时刻到来了」「人の心を揺り動かす時がやってきた」、「美好的日子已经远离我们而去了」「素晴らしき日々はすでに私たちから遠ざかっていった」などと言ったりする。また、「走近香港回归的日子」「香港返還の日に近づいていく」、「度过三年困难时期」「三年の苦しい時期を過ごす」などと言うこともできる。

さらに「上下の高さの変化」を用いて抽象的な「数量」の概念をメタファーで表現することもある。たとえば「物价上去了」「物価が上昇した」、「道琼斯指数跌到了谷底」「ダウ・ジョーズ指数が底まで落ちた」などのように言う。¹¹

さらには「ある種の駆動力」を表現する言語を以て「しからしめる原因」の概念に喩える場合もある。たとえば、「这一席话使我坐立不安」「その話は私をいても立ってもいられなくした」、「政局不稳使股市动荡」「政局不安が株式市場を動揺させた」などがその例である。

その他、「ある容器」で抽象的な「カテゴリー」の概念を喩えることもある。「这个范畴所包含的成員」「このカテゴリーに含まれる成員」、「这个概念不在这个范畴之内」「その概念はこのカテゴリーの中にはない」などがその例である。

さらに例を挙げると、“用语言交流信息和情感”「言語を用いて情報と感情を交流する」という文の中には、“信息或情感是一种东西”「情報あるいは感情はあるモノである」「交流就是一种传递过程」「交流とは一種の伝送のプロセスである」「交流信息和情感就相当於一个物件的传递」「情報や感情を交流することはあるモノを伝送していくことに相当する」という三つの関連したメタファーが含まれており、これらを「導管メタファー」と総称することができる。¹² 以下はこの種のメタファーを用いた例である。

- (25) a. 这篇文章包含许多观点。「この文章は多くの観点が含まれる」
- b. 这句话的含义很深。「この言葉に含まれた意味は深い」
- c. 字里行间充满了感情。「字句の間に気持ちが充満している」
- d. 我托他转给你这个信息。「私はこの情報をあなたに送るよう彼に託す」

「メタファー」にはまた、いわゆる「解釈的メタファー」と「構成的メタファー」とがあり、自然言語の内容はこの二種のメタファーを通して表現され理解されることが多い。「解釈的メタファー」とは、抽象概念を形成する手段であり、抽象概念がいかにかに形成されたかを説明するだけのメタファーを言う。「構成的メタファー」とは、それ自体が抽象概念を構成するもので、そこから離れると概念は存在しない。

前者は“电脑文件处理就是办公室文件处理”「パソコンのドキュメント処理はオフィスでの書類処理である」のようなもので、これこそが認知モデルを体現したメタファーなのだ。ここには“视屏是窗口”「モニターウィンドウは窓である」、「屏幕是桌面」「画面はデスクである」といった説明的な概念メタファーが多く含まれる。書類を保存する“档案夹”「フォルダ」がある、書類を捨てる“字纸篓”「ごみ箱」がある、“病毒”「ウィルス」が機械を“瘫痪”「ダウン」させるなど、いずれもこの種のメタファーの言語表現である。コンピュータの専門家にとっては、これらのメタファー表現は当然のことながら単なる解釈的なものにすぎないが、一般のユーザーにしてみれば、これらは解釈的であるばかりか、構成的なものでもある。なぜなら一般の人はこれらのメタファー表現を離れてはコンピュータの作業原理を理解することができないからである。

著名な科学者クーン(Thomas S. Kuhn)は、いくつかのメタファー表現は科学者にとっても構成的なものでありうると考えた。彼が挙げた例は、物理学者ボーア(Niels Bohr)が作った原子構造模型である。一般に電子は軌道に乗って原子核の周りを回っ

ていると考えられているが、この模型の表現するところは、「原子は（小型の）太陽系である」というメタファーに基づいており、原子核が太陽、電子は軌道に沿って運行する惑星である。だが一般の人に対するこのような説明とは逆に、ボーアによる原子と電子についての科学的定義は、電荷を持つ粒子は力学・電磁学の規律の支配のもと相互に作用する、というものであった。このプロセスを表現する場合もメタファーから離れることはできず、この場合は原子核と電子とを往復運動を行うピンポン玉に喩えることができる。彼は「原子核と電子はピンポン玉である」というメタファーを直接用いて原子構造を表現しているわけではないが、このメタファーを一つの尺度として原子核と電子の装置として電子運動を考えている。したがって判断の尺度に充当するという意味において、「ピンポン玉」のメタファー表現は、解釈的であるだけでなく構成的なものでもあるのである。このほか、宇宙の起源である“大爆発”「ビッグバン」に関する現今の理論物理学の理論はまさにこの“爆発”のメタファーの上に打ち立てられたものであると想像する理由を我々は持つ。このことから、メタファーを離れては科学的創造を行うことはできない、あらゆる創造的な仕事はすべてメタファーのかたちを借りて表現されねばならず、空間・時間・物質といった物理学の基本的な概念ですら、メタファー表現の特徴を帯びていると考える人もいる。¹³

自然言語においては、更に多くの現象をメタファーの作用によって分析し明らかにすることができる。

たとえば、「熟語（イディオム）」の理解や分析にはしばしばメタファーの助けを借りることがある。極度の怒りを表す英語のイディオム“flip your lid”「壺のフタをぐいと開ける」、 “blow the stack”「煙突が爆発する」、 “hit the ceiling”「天井を直撃する」などを理解しようとするとき、実際には「怒りは容器に密閉されている加熱された液体である」というメタファーと関連するイメージに依拠してこれらの意味を理解するのである。「液体を容器の中に密閉して加熱する」ことは一般的な心的イメージであり、このイメージに対する人の知識の一部には、「ある段階まで加熱すると、気体は容器を爆発させたり容器のフタをとばしたりする」というものが含まれている。上述のメタファーはすなわちこのイメージについての知識が、人が憤怒したときの身体状況に投射されているのである。

さらに、「複合語」も二種類のメタファー形式で構成されていると分析することができる。その一つは「部品形式」のメタファー構造である。つまり全体が部品によって組

み立てられているものである。この場合、複合語の意義は構成素の意義の重なりに等しい。たとえば、“大衣”「オーバー」は“大+衣”「大きな衣類」に等しく、“学习”「学習する」は“学+习”「学んで習う」に等しい。もう一種類は「足場形式」のメタファー構造である。ここでは構成素はビル建築の際に用いる足場のようなものにすぎず、ビルが完成すれば足場は撤去される。たとえば、“轮椅”「車椅子」の全体の意義は、構成素の意義の単なる重なりより大きく、単純に“輪+椅”に等しいということにはならない。

また、「多義語」も「家族的類似性」(family resemblance)のメタファーに関連した現象であるとみなすことができる。¹⁴ 多義語において、共通した特徴を持たないある一つの語義項目からもう一つの語義項目への派生はいずれもメタファーを通して行われる。たとえば“健康的身体”「健康な身体」、「健康的皮膚」「健康な皮膚」、「健康的运动」「健康な運動」と言うとき、“健康”「健康」の語義の核心は身体が元気であるということである。健康である結果きれいな皮膚があり、健康であるのは良い運動をしているからである。したがってここでかかわってくるのは、事物の結果や原因をもって事物をメタファーするということである。

「語法構造」にも大量のメタファー現象が含まれる。認知言語学の仮説によれば、人の言語能力は一般認知と思考能力の一部である。人の頭の中の概念や概念構造が本質的に一定のメタファー的性質を持つ以上、言語における語法構造もまた、おのずとメタファーの性質を備えることになる。例えば以下の例を見てみよう。

- (26) a1. 小猴子在马背上跳。「小猿は馬の背中で跳ぶ」
a2. 小猴子跳在马背上。「小猿は馬の背中に跳ぶ」
b1. The little monkey jumped on the horseback.
「小猿は馬の背中で跳ぶ」
b2. The little monkey jumped onto the horseback.
「小猿は馬の背中に跳ぶ」

先に述べたように、(26a)のような漢語の文の語順は、主に「時間順序の類像原則」に符合している。これは先に発生した動作が語法構造中の語順では前に置かれ、後に発生した動作は後ろに置かれるというものである。これは語法構造におけるメタファーの体現の一つである。

また (26b) のような英語の文では語順には変化がないように見えるが、実は「位置シミュレーションの類像原則」＝“位置模似的象似原則”に符合している。つまり「仲介物」(粘着剤や紹介者のようなもの)としての動詞の位置は、二つの結びつけられる物体の間にあるというものである。これも同様に語法構造におけるメタファーの体现の一つなのである。¹⁵

3.2. 転喩 (metonymy) と漢語の“転指”分析

言語の認知分析の中で、“隠喩”「メタファー」と密接に関わるものとして、さらに“転喩”「メトニミー」の概念がある。¹⁶ メトニミーとメタファーの共通点は共に概念形成の手段であるところである。しかし、次の点では異なる。メタファーは二つの類似した認知モデルの間での「投射」だが、メトニミーは二つの関係するする認知カテゴリー(同一の認知モデル内にある)の間の「渡り」なのだ。¹⁷ 投射とは突然の変化であり、渡りとは次第に変わることである。メタファーの起点域は具体的なものでなければならず、メトニミーは際立つものでなければならぬ。当然ながら、認知カテゴリーと認知モデルの境目は決して明快なものではない。一連の漸進的变化も突発的な変化の印象を与えるかもしれないし、具体的なカテゴリーもかなり明瞭なカテゴリーであるかもしれない。従って、メタファーとメトニミーの認知手段を同時に利用する状況もまた多い。たとえば、しばしば“脸色通红”「顔が真っ赤」「火气上升」「血気が上がる」などで“发怒”「怒る」が表されるが、このようなメトニミーはまた“愤怒是火”「愤怒は火」「身体是感情的容器」「身体は感情の入れ物」と言ったメタファーと一緒に組み合わせられる。¹⁸ たとえば“怒火中烧”「怒りの炎が胸に燃える」、「强压怒火」 「ぐっと怒りの炎を抑える」などと言う。しかしながら、ともかく、メタファーは主に理解の手段であり、メトニミーは主に代替の手段であるといえる。たとえば以下は典型的な「メトニミー」により概念や事物の代替をする例である。

(27) a 壶开了。「ポットが湧いた」。

（“壶”指代壶中水）（「ポット」でその中の水をさす）

b 我买了一台索尼。「ソニーを一台買った」。

（“索尼”指代索尼牌电视）（「ソニー」でソニー製のテレビを指す）

c 白宫没有表态。「ホワイトハウスは黙っていた」。

- (“白宮”指代美国政府) (「ホワイトハウス」でアメリカ政府を指す)
- d 我喜欢读鲁迅。「私は鲁迅を読むのが好きだ」。
(“鲁迅”指代鲁迅的书) (「鲁迅」で鲁迅の書籍を指す。)
- e 一日不见, 如三秋兮。「一日会わねば、三年のようだ」。
(“秋季”指代一年) (「秋」で一年を指す)
- f 他瞎了。「彼は目が見えなくなった」。
(“他”指代他的眼镜) (「彼」で彼の目を指す)
- g 他又在敲键盘了。「彼はまたキーボードを叩いていた」
(“敲键盘”指代在计算机上进行工作或游戏)
(「キーボードを叩く」で、計算機で仕事をしているか遊んでいる事を指す)

「メトニミー分析」を用いると、第六講と第七講で検討した漢語の“的”字構造(X的)の転指問題を処理できるかもしれない。^{19,20} 先ほどは、“転指”とは“X的”を使って一人の人あるいは事物“Y”を指すと言った。²¹ 統語分析の角度からすれば、もしその中の“X=VP(動詞フレーズ)”ならば、“X的”の転指が成り立つ条件は、“X”の中に取り除かれた主語か賓語の部分が必要だということになる。²² 例えば、

- (28) a () 开车的。 (人を指す。 X文の主語を抜き取り空位*²³とするので)
b 老张开() 的。(車を指す。 X文の賓語を抜き取り空位とするので)
c *他开车的。(技术, X 无空位) (技術を指す。X文に空はない。不成立)
d *他开车的(场地, X 无空位) (場所を指す、X文に空はない。不成立)

しかし、その後、この「主語・賓語の位置に空を設ける」説に基づいて作られた“X的”の転指規則は、決して厳密なものではなく、コンテキスト(上下の文)によっては、例えば先の(28c・d)で転指できない“X的”も転指できるようになってしまうことがわかった。例えば、

- (29) a - 你在技校都学会了哪些技术? 「専門学校でどんな技術をマスターしたいの」。
- 开车的, 修车的, 多着呢。「運転、修理と沢山あります」。
(“开车的”は“技术”を転指する)
- b - 公园里有好几块场地, 孩子们开车的有篱笆围墙围着。

「公園には沢山のブロックがあり、子供が車を運転する所には、垣根で囲ってある」

(“孩子开车的”は“場所”を転指する)

実際に踏み込んだ観察をすると、「主語か賓語が空」という規則は必ずしも役には立たず、たかだかコンテキストによるだけでも“X的”の転指規則を本当にきちんと説明できなくなる。というのも、具体的な言語表現の中に表れる“X的(Xは動詞フレーズに限られない)”で中心語*を転指する時には、やはり制限を受ける状況があるからである。例えば、一つのバックを指さして、“这是小王的”と言うことはできる。しかし、通常、父兄会で王君の父を指して人に紹介するとき、“这是小王的”とは言わない。“X的”で中心語を転指する時には複雑な制限を受けることがわかる。例えば、以下の各種“X的(Xは動詞フレーズに限られない)”が転指できるかどうかは一樣ではない。比較してみよう。

(30) a	经理的(外套)	「経営者の(オーバー)」	*经理的(身份)
b	半年的(利息)	「半年の(利子)」	*半年的(时间)
c	灰姑娘的(裙子)	「シンデレラの(スカート)」	*灰姑娘的(故事)
d	小王的(书包)	「王さんの(カバン)」	*小王的(爸爸)
e	塑料的(拖鞋)	「ビニールの(スリッパ)」	*塑料的(弹性)
f	兔子的(窝儿)	「うさぎの(小屋)」	*兔子的(尾巴)
g	全部的(材料)	「全部の(材料)」	*材料的(全部)
h	词典的(封皮)	「辞典の(表紙)」	*词典的(出版)
i	爸爸的(书桌)	「お父さんの(机)」	*爸爸的(赞扬)
j	建造的(桥梁)	「建築した(橋)」	*桥梁的(建造)
k	中国的(河流)	「中国の(河川)」	*中国的(长江)
l	琉璃瓦的(建筑)	「琉璃瓦の(建築)」	*琉璃瓦的(天安门)
m	北京的(老百姓)	「北京の(住民)」	*老百姓的(北京)
n	托运的(行李)	「託送の(荷物)」	*托运的(手续)
o	买房的(个人)	「家を買った(人)」	*买房的(问题)
p	访美的(人员)	「訪米の(人員)」	*访美的(报告)
r	迟到的(同学)	「遅刻した(同級生)」	*迟到的(原因)
s	学外语的(人)	「外国語を学んでいる(人)」	*学外语的(目的)

t	切脉的(大夫)	「脈を診る(医者)」	*切脉的(方法)
u	他贊成的(意見)	「彼が贊成した(意見)」	*他提出的(意見)
v	他反对的(立場)	「彼が反对した(立場)」	*他采取的(立場)
w	他否定的(結論)	「彼が否定した(結論)」	*他得出的(結論)
x	白的(衬衫)	「白い(シャツ)」	*雪白的(衬衫)
y	健康的(孩子)	「健康な(子供)」	*健康的(問題)
z	漂亮的(姑娘)	「奇麗な(娘)」	*美丽的(姑娘)

上記の(28~30)の中の“X的”が中心語を転指できるか否かという現象は、それぞれ異なる。とはいえ、認知言語学が示す「メトニミー」によってまとめて説明できる。あるいは言語中の“転指”の規則はほぼ「メトニミー」の規則に相当すると言ってよい。“X的”の転指規則を説明するためには、まず「メトニミーの認知モデル」を決めておく必要がある。これは以下の(31)のように言い表せる。

- (31) a あるコンテキストにおいて、ある目的のために、概念Aを用いて目標とする概念Bを指し示さねばならない。
- b 概念Aを用いてBを指し示す為には、AとBとが一つの「認知的枠組」の中に共になくてはならない。
- c 同一の認知的枠組の中にあるA及びBは密接な関係があり、Aが活性化されれば、Bもそれに連れて活性化されることになる。
- d AがBを付帯的に活性化させるなら、Aは認知的に「際立ち」がBよりも必ず高い。
- e メトニミーとはAとBとが、ある認知的枠組の中にあり、互いに影響関係をもつモデルであり、この影響関係はAからBへの関数関係だと言って良い。

(31)の意味を、最も明快な例で言えばこうなる。つまり、“壺开了”は“用壺(起点概念A)”で“水(目標概念B)”をメトニミー表現(転指)する、この“壺”と“水”とは共に“容器-内容物”という認知枠内にあり、両者は密接に関係し、概念“壺”の活性化が“水”の概念の付帯的活性化を導いている。“壺”は認知上“水”より際立つ。

“壺”は見えるが“水”は中において見えないし、湯が沸いたとき我々に見えるのは沸騰する水ではなく、やかんの注ぎ口がしきりに湯気をふき、蓋がばかばかと跳ねているところだからである。これこそが、メトニミーの一般的規則である。その中で最も重要な所は「認知的枠組」と「際立ち」と言う概念である。

まず、「メトニミーの認知的枠組」が“X的”の転指作用をどのように分析するか見てみよう。

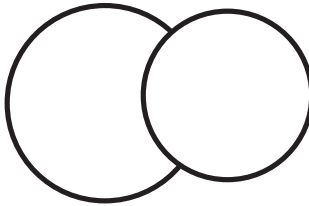
認知的枠組とは、人類が経験に基づき作り上げた概念と概念の間の相対的に固定した関連付けのモデルであり、人類にとっては、各種の認知的枠組は、人類が自らを認識した産物であり、人類と外界との相互作用によって生まれたものである。例えば、「容器—内容物」という認知的枠組は人類が最初に自らを認識して作り上げたものである。つまり、身体は一つの容器に他ならず、生きることの最も基本的な事柄は、呼吸・摂食及び排泄であり、それ故そこには容器同様に内外の区分がある。“壺”「やかん」、「房屋」「家屋」などの事物は、人類がこの基本的な認識を基に作り上げたものである。また、例えば子供が自分の両手両足と身体との関係を身を以て知ること、
「全体（統一体）と部分」という認知的枠組を打ち立てる。また手で何度もおもちゃを取り上げたり置いたりすることにより、「動作主—動作—被動者」という認知的枠組みを作り上げる。このような認知的枠組の一つ一つが心理的には「ゲシュタルト構造」であり、それを作り上げる構成要素及びそれらの関係は、人々の日常の経験の中で形を変えて何度も現れてくる。このような認知的枠組があってこそ、“X的”の転指の状況を初歩的に説明できるのである。以下の例を比較してみよう（それぞれの上の行が「認知的枠組」であり、下の行が“X的”の転指する実例である）。

- (32) a 所有者—所有物（学生和书包「学生とカバン」、小孩和玩具「子供と玩具」）
 小王的（书包）「王さんの（カバン）」
- b 物体—性状（桌子和大小「机と大きさ」、女孩和胖瘦「女の子と太り具合」）
 苗条的（姑娘）「スタイルの良い（女性）」
- c 経験者—行為/経験（宝宝哭「子供が泣く」、他失败了「彼は失敗した」）
 开车的（人）「車を運転した（人）」、小宝写的（字）「子供が書いた（字）」
- d 動作主—動作—受け手—被動者（玲玲送老师一束花「玲玲が先生に花を一束贈る」）
 玲玲送老师的（花）「玲玲が先生に贈った花」

- f 動作主—動作—終点—被動者（老張把书放在箱子里「張さんが本を箱に入れる」）
老張放书的（箱子）「張さんが本を入れた箱」

主観的な心理の構造物としては、認知的枠組は客観的な現実より単純なものになるものである。例えば、実際に発生したのが、“他深夜在公路上飞快地开车”「彼は深夜公道で飛ぶように車を走らせた」というイベントだったとしよう。しかし、認知主体となる人がこの状況を「動作主—動作—被動者」の認知的枠組みに組み入れると、動作主の「人」と被動者の「車」はその認知的枠組にあるが、走らせた時間の“深夜”や、場所の“公道”、様態の“飞快地”「猛スピード」は、通常この枠組みの中にはない。このような認知の仕方はゲシュタルト知覚と一致するものである。下の図を見てみよう。

(33)



我々はたとえ、重なっている物が別の形であっても、心理的には図(33)を一つの丸が部分的に別の丸の上に重なっているように見てしまうものである。なぜならば、丸は相対的に“好”「好ましい」形であり、一つの「ゲシュタルト」だからである。これもなぜ、“開車的”を聞いたり見たりした時に、「動作主—動作—被動者」という認知的枠組（ゲシュタルト）に基づいて推察可能な欠けた成分は動作主の「人」であり、時間や場所や様態ではないことを説明する。つまり、「人が車を走らせる」とは、一つのゲシュタルトといえても、「深夜に車を走らせる」、「公道で車を走らせる」、「猛スピードで車を走らせる」などはゲシュタルトではないのだ。「時間」「原因」「様態」「目的」などのいわゆる「環境成分」は、通常はこの認知的枠組の中にはないので、やはり転指の対象にはなれない。これこそが、先の(30)の中の“*到站的(時間)” “*迟到的(原因)” “*切脉的(方法)” など、“X的”の転指される中心語が制限を受ける理由なのである。

「認知的枠組」の利用による“X的”の転指分析は、統語成分分析を用いる方法に比べて一層効果的であるようだ。例えば、“X的”で中心語となる名詞は統語上の修飾成分*ではないが、認知的枠組の概念成分である。従って“X的”の転指対象となる。逆に、統語上の修飾成分は必ずしも認知的枠組に関係する概念成分ではないので、必ずしも転指されうるとは限らない。例えば、(34a)の“伤口”「傷口」は統語上の修飾成分ではないが、“伤口”は毒蛇が咬んだ結果として「動作主－動作－結果」の認知的枠組の中に置かれている。よって“毒蛇咬的”「毒蛇が噛んだ」は“伤口”を転指できるのである。

(34b)の“这些事”は“在行”「得意である」と同一の認知的枠組の中にあり、ある人が“在行”と言うときは概ね“在行”である事柄と関係するのである。一方、ある人が“精明”「聡明である」と言うときは、必ずしも何らかの事柄と関連する訳ではない。よって、“他最在行”「彼が最も得意である」は、“这些事”「これらのこと」を転指することができるが、“他最精明的”「彼が最も聡明である…」は“这些事”「これらのこと」を転指することはできない。比較してみよう。

- (34) a 毒蛇咬的(伤口)「毒蛇が噛んだ(傷口)」
b1 这些事他最在行「これらのことは彼が最も得意である」/
他最在行的(事)「彼が最も得意である(こと)」
b2 这些事他最精明「これらのことは彼が最も聡明である」/
*他最精明的(事)「彼が最も聡明である(こと)」

「認知的枠組」を利用すると、“X的”の転指を分析する時、述語の語義との関係づけもやりやすくなる。“切”「(ナイフなどで)切る」、捆「束ねる」、犁「(すきで土を)すく」などの動詞について言えば、“工具”「道具」が認知的枠組内の構成要素であり、“放”「置く」、堆「積む」、装「(モノを容器や運搬具に)しまい入れる」などの動詞について言えば、“处所”「場所」こそが認知的枠組の構成要素である。この視点から、(35)の“X的”の転指の区別も説明することができる。比較してみよう。

- (35) a1 我捆书的(绳子)「私が本を束ねた(ひも)」
a2 *我借书的(绳子)
b1 他们堆化肥的(屋子)「彼らが化学肥料を積み上げた(部屋)」
b2 *他们卖化肥的(屋子)

概念の中には、二つの認知的枠組によって共有され、二つの認知的枠組が一つの複合された認知的枠組を構成するものもある。このように今まで説明できなかった“X的”が中心語を転指するという現象を説明することができる。例えば、

- (36) a. 头发稀少的(老人)「髪がまばらである(老人)」
- b. 儿子上大学的(家长)「息子が大学に通っている(保護者)」
- c. 两个合住一间的(客房)「二人で一間の(客室)」
- d. 九十块钱一桌的(酒席)「ひとテーブル90元の(宴席)」
- e. 百年难遇一次的(地震)「生涯に一度逢うか逢わないかの(地震)」

(36a) “老人”と“头发”「髪」は「全体(統一体)－部分」という認知的枠組に属し、“头发”と“稀少”「まばらである」は「物体－性状」という認知的枠組に属す。“头发”は二つの認知的枠組の共有要素である。“老人”はこの複合認知的枠組に置かれるために、“X的”によって転指される。(36c)は「数量－分配」(二人で一部屋)と、「事物－数量」(一客室)の二つの認知的枠組を包括し、数量の“一間”が二つの下位枠組の共有成分となる。よって、中心語の“客房”「客室」が、“X的”の転指対象となりうるのである。(36)の他の例の状況もその通りである。(以下続稿)

*この訳稿は、人文論叢第40巻4号 に掲載されたものの続稿である。

訳注

¹ 時間順序の原則について述べたものに、Tai James H-Y. 1985. "Temporal Sequence and Word Order in Chinese." *Iconicity in Syntax*, John Haiman, ed., Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, pp.49-72 (黄河訳 1988<時間順序和汉语的语序><国外语言学>第1期, pp.10-20.)、戴浩一 1987<以认知为基础的汉语功能语法><功能主义与汉语语法>, 戴浩一、薛凤生主编, 北京语言学院出版社、1993. "Iconicity: Motivations in Chinese Grammar." *Principles and Prediction: The Analysis of Natural Language*, Mushira Eid and Gregory Iverson, eds., Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, pp.153-174、Tai James H-Y and Hsueh Frank F.S. (eds.) *Functionalism and Chinese Grammar*, 1989, Chinese Language Teachers Association Monograph Series, No.1. pp.187-226 (叶蜚声訳1990<以认知为基础的汉语功能语法刍议(上)><国外语言学>第4期, pp.21-27/, 叶蜚声訳1991

<以认知为基础的汉语功能语法论议(下)>《国外语言学》第1期, 25-33)がある。時間順序の原則は(資料)「中国語研究と認知言語学 その1」訳注(3)で触れた「類像性」(iconicity)に関係する。中国語の統語構造の類像性は「二つの統語単位の相対的な語順はそれが表す概念領域の状態の時間順序に決められる」という「時間順序の類像性」に従っている:

“他坐公共汽车到这儿”「彼はバスで(ここに)来た」

“他到这儿坐公共汽车”「彼はバスに乗るためにここに来た」

中国語の文の語順は動作の順序と一致するが、対する英語の文の語順は抽象的な統語規則を受けている。中国語は大幅に時間順序の類像性に従うのである。つまり、中国語の統語構造は統語構造と形態カテゴリーにおける作用より多く概念領域の原則を参照している。概念構造から表層構造への投射から見れば、中国語のような形態標識が不足する言語は直接写像する方法を取るのである(沈家煊1993<句法的象似性问题>《外语教学与研究》第1期)。

² 有界(bounded)と非有界(unbounded)に関する論文には沈家煊1995<“有界”与“无界”>《中国语文》第5期, pp.367-380、沈家煊2004<再谈“有界”与“无界”>《语言学论丛》第30辑, 40-54がある。また、張黎2003<“界变”论—关于现代汉语及及相关现象>《汉语学习》第1期, 17-23では、「有界」に関して、「了」が「界变」(bounded change)を表すことを主張している:

(i) 時空の有界変化: 前面就是天安门了/明年就要毕业了

(ii) 時間軸上の有界変化: 炸弹爆炸了

(iii) 状態の有界変化: 红了 大了 长了 冷了

(iv) 性質の有界変化: 大姑娘了 十八了 成人了

(v) 視点の有界変化: 我吃三个面包了/她学三年英语了

(vi) 評価の有界変化: 太好了 太棒了 太热了 太贵了

(vii) 態度の有界変化: 你多吃点儿了! 一不了, 不了, 谢了, 谢了

その中で(i)~(iv)は客体の有界変化であり、(v)~(vii)は主体の有界変化である。

³ 視野にある対象を一つのまとまりのあるものとして知覚する心的作用を体制化(organization)といい、体制化により形成されるまとまり(構造体)を「ゲシュタルト」という(辻幸夫2003)。このゲシュタルトには主に次の四つの原理がある(Ungerer & Schmid 1996):

①「近接の原理」: 僅かの間隔でしか隔てられていない個々の要素は、何らかの形で相互に関連し合っているように知覚される。

②「類同の原理」: 互いに類似する個々の要素は、同一の切片として知覚される。

③「閉合の原理」: 知覚的な機構化は閉鎖された図形を基本とする。

④「連続の原理」: 断絶が始まらないような一連の要素は、纏まった全体として知覚される。

(資料) 中国語研究と認知言語学 その1* 訳注3を参照。

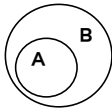
沈家煊(1999)では一つの構文を一つのゲシュタルト構造、即ち全体構造とみなし、構文分析に応用している。その全体構造とみなされる構文それ自身が持つ意味はどのように形成されるかを考える上で、次の四つの基本的な認知規則が概念領域(意味)において繰り返し作用していると考える:

① 順序原則:

Ⓐ Ⓑ Ⓒ

BがAの後ろにあり、CがBの後ろにあれば、A、B、Cは序列である。空間領域において一つの序列であり、時間領域やその他の領域でも一つの序列である。例えば、我々がこの図を描く時、先ずAを、次にBを描き、最後にCを描く。

② 包容原則:



もしAがBの中に含まれるなら、BはAの中に含むことはできない。「容器」と「内容物」の関係は認知において、最も基本的な関係の一つである。例えば、もしネックレスが箱の中にあるならば、箱はネックレスの中にはあり得ない。

③ 隣接原則:

| | | | | |

平行線が示すように、隣接する二つの成分は一つの単位に捉えられる傾向にある。具体的な距離もそうであるし、抽象的な距離もそうである: “小王” “王さん”と “他妈妈” “(王さんの) お母さん”の間の距離は “小王” “王さん”と “他同事” “(王さんの) 同僚”の距離より近いために “小王”と “他妈妈”は “一家人” “家族”である。

④ 数量原則:



数の多さを認識することは人間の基本的な認知能力の一つである。数の概念は様々な面に存在する。リング三個はリング一個より「多い」のは、我々がリング三個を手にする方がリング一個を手にするより「多く」力を出す必要があり、リング三個を食べる方がリング一個を食べるより時間がかかる。リング三個を見る方がリング一個を見るより網膜上の神経細胞を一層活性化する。(沈家煊2006,

pp.60-61)

- ⁴ 訳注3の①②を参照。
- ⁵ つまり目標を表す“给张老师”はイベント内になければならないということである。
- ⁶ 訳注3の③を参照。
- ⁷ 訳注3の④を参照。
- ⁸ 予め指定された値のこと。ここでは“卖”「売る」が所有権を「人に与える」という「授与」の意味を持っているということ。
- ⁹ 相同性 (homology) とは起源が同じで構造に対応関係にあることである。
- ¹⁰ メタファー (metaphor) 「隠喩」とはある概念 (起点領域, 具体的) を利用して別な概念 (目標領域) を表すことであり、この二つの概念の間の相互的な繋がりが必要である。メタファーには「構造メタファー」(Structural Metaphor)、「方向メタファー」(Orientational Metaphor)、「存在メタファー」(Ontological Metaphor) などがあり、本稿の“辩论” (弁論) の例はArgument is war「議論は戦争である」という構造メタファーである。
- ¹¹ 「方向メタファー」(Orientational Metaphor) の例である。他に“科学技术使农业产量逐年提高”「科学技术が農業生産量を年ごとに高めている」などの例がある (赵艳芳 2001)。
- ¹² 導管メタファー (Conduit Metaphor) とは次のようなコミュニケーションのメタファーである:
- ① IDEAS ARE OBJECTS (考えは物体である)
 - ② LINGUISTIC EXPRESSIONS ARE CONTAINERS (言語表現は容器である)
 - ③ COMMUNICATION IS SENDING (コミュニケーションは送ることである)
- (Lakoff and Johnson (1980, 10) による要約, 谷口一美 2003)
- ¹³ 軌道メタファー (orbit metaphor) で原子構造理論 (Atoms are solar systems) を打ち立てた例である。
- ¹⁴ 家族的類似性 (family resemblance) とはあるカテゴリーの成員が相互に類似しているそのあり方が、ある家族のメンバーが相互に類似しているそのあり方と同じ構造を持っていること。(辻幸夫 2003, pp.100-101) 袁毓林 (1995) は「家族的類似性」が品詞カテゴリーにも見受けられることを主張している。具体的な例については (資料) 中国語研究と認知言語学 その1の訳注 (7) を参照。
- ¹⁵ 英語の例では (26a) は“jumped on”「～で跳ぶ」、(26b) は“jumped onto”で「～に跳ぶ」という意味を表している。これは前置詞“on”が「接触している」という状態を表すのに対し、“onto”は「～に接触するようになる」という位置変化を表しているということであろう。
- ¹⁶ 転喩「メトニミー」は概ね中国の修辞学という借喩・借代を指す。認知言語学では人が事物を認識する一種の重要な方法であると考えられる。ある物体、ある出来事、ある概念には多くの属性があり、人の認知は一層多くの注意を最も際立つもの、最も容易に記憶、理解する属性、即ち際立つ属性に向けることである (赵艳芳2003, pp.115-116)。

¹⁷ “投射”「投射」とは類似事象による移し替え、“过度”「渡り」とは指示物からの連想や示唆のことである。

¹⁸ メタファーの典型的な表現型は“A是B”「AはBである」の形をとる

¹⁹ 漢語の“的”字構造(X的)の転指問題：漢語には“動詞語+的”という表現があり、あらゆる動詞フレーズがこの動詞語の部分にはいることができるが、この形の中には、そのままで独立した主語や賓語となり、人や事物を指すことができるものと、それができないものがある。また、独立して使われても複数の意味を指す場合がある。その理由を巡る議論。P106参照。

²⁰ 第六課“配价理论与配价结构分析”「配価理論と配価構造分析」：動詞の結合可能性を化学式の結合価(手)のように考えて、様々な「動詞+“的”」構造を分析するもの。動詞は0価～3価まで分けられる。例：“开”「運転する」は、動作主と作用物の2つに結びつく手をもつので2価の動詞となる。“开车的”「車を運転する(…)」が“人”を指すのは、このフレーズに使われる動詞“开”が既に作用物の“车”「車」を持つので、空いている手の動作主の“人”を指すことになるのだというもの。たとえば“他开的”「彼が運転した(…)」は“车”を指すことになる。“开的”「運転した(…)」の場合は両方の手が空いているので“他”「彼」・“车”「車」いずれも指すことができ、複数の意味を持つことになる。よって、車を運転する“技术”「技術」は指せない事になる。以下参照。

第七課“空语类理论与空语类分析”「空カテゴリー理論と空カテゴリー分析」：空カテゴリー理論とは、完全文を想定し、実際の文が簡略にも関わらず通じるのは空位つまり省略で補って考えるからだとするもの。これが“X的”の転指分析に用いられると、“X的”の“X”のフレーズの中では“提取”「抜き取り」が行われて、そこに空位()ができ、その空位()になった部分を“X的”が示すものと考えることになる：

例 他开车 → () 开车的 / 人, 他开() 的 / 车, () 开() 的 / 人 车

²¹ 転指：「语法上一般把可独立使用至有指称作用的“X的”叫做“转指X的”，把不能独立使用并且没有指称作用的“X的”叫做“自指X的。”(《汉语和汉语研究十五讲》p157)

²² 第7課「空カテゴリー理論」による。